

反骨の絵師 歌川国芳

飯沢 匡



荷宝藏壁のむし書



反骨の絵師歌川國芳

集

匡

板

二

画

少

一

二

一

飯沢 匡 (いざわ・ただす)

1909年生。劇作家、演出家及び放送作家。

戯曲は「藤原閣下の燕尾服」より、「鳥獣合戦」「崑崙山の人びと」「ヤシと女」など問題作を次々と発表、「五人のモヨノ」「もうひとりのヒト」の後、最新作「天保の戯れ絵」に至る。また、小説集、エッセイ集のほか、子ども向けの本にも読者が多い。

反骨の絵師 歌川国芳

一九七二年六月二〇日 初版第一刷発行

著 者 飯沢 匡

発行者 井上達三

発行所 株式会社 筑摩書房

一〇一―九一 東京都千代田区神田小川町二ノ八

(一九二) 七六五一 (代表)

振替 東京四二二三

印刷・三松堂 製本・積信堂

もくじ

天保の戯れ絵——歌川国芳（三幕八場）……………三

屏風の裏……………二七

反骨の絵師・国芳

浮世絵師・国芳……………二〇五

江戸の幽霊……………二二六

国 芳……………二四四

あとがき……………二五三

上演記録……………二五五

舞台写真撮影 中野英伴

国芳版画提供 鈴木仁一 飯沢 匡

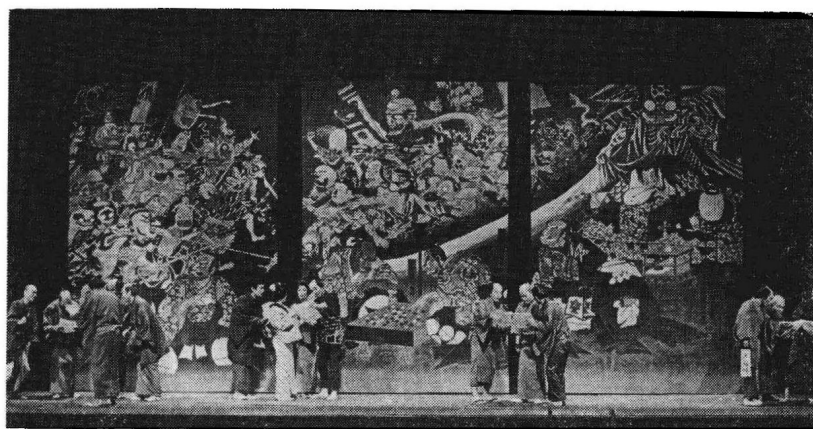


反骨の絵師 歌川国芳

天保の戯れ絵

——歌川国芳

（三幕八場）



人物

歌川国芳

胡瓜先生（橋川又右衛門）

留吉（染物屋柳屋の手代）

目明し

梅屋鶴寿（秣問屋遠州屋）

加賀屋主人（版元）

歌川国貞（国芳の兄弟子）

岩井半四郎（歌舞伎女形）

家主 平兵衛

おせい（国芳の妻）

少年 為公（後に武蔵屋為三郎）

遠山金四郎

権助（通いの下男）

歌川芳虎（国芳の弟子）

歌川芳雪（同）

歌川芳艶（同）

歌川芳玉（同）

歌川芳宗（同）

船頭

料亭の女将 同女中

芸者一、二、三

毛利家の用人

奉行宅近侍

長屋の者

その他、町人

第一幕第一場

プロローグ

幕揚る前から囃子が聞え、次いで賑やかな、チョボクレ（天保改革を諷したもの）が聞えて来る。幕揚ると舞台一面に国芳筆の水野越前守を弾劾した諷刺錦絵「源頼光公館土蜘蛛作^{サム}妖怪^{マユ}凶」の巨大な写真引伸画があり、その前で当時の江戸庶民が、四つのグループになり、手にした錦絵の三枚続きを、あれこれ取沙汰している。絵の上部にある妖怪群が、実は江戸庶民の怨念の絵画化であることを人々は知ったので、みなその大胆さに驚くと共に、永い間の胸のつかえが除れた感じでのるのだ。

Aグループ

なるほどそうか、いや、そういわれてみれば。（笑）

Bグループ

いや、うまくうがったもんだね。こいつは恐れ入りました。

Cグループ

へえ、国芳って人は、よっぽど胆が太いね。こんな怖いことをしてさ、首が飛

ぶよ。

Dグループ

ああ、永い間の胸のつかえが降りたよ。面白れえ面白れえ。

右のような言葉が、がやがやという声の中から際だって聞えてくる。そこに憎まれ者の目明しの姿が見えるので、人々、急に知らせあい黙って散々になる。たった一人、染物屋の手代といった男（留吉）が得意になって、声高かに、しゃべっているので目明し近づいてゆく。

留吉 ……だからお前さん、この国芳っていう師匠は、いつてみれば私の親戚も同然……

だからね……。

目明し おい！

留吉 あっ。（目明しと見て）へい。

目明し 何かお前、この錦絵について知ってることがあるらしいな。

留吉 いいえ……その大したことじゃございませんので、へい。

目明し 大分、声高かに、得意そうにしゃべってたじゃねえか？

留吉 いいえ……なに……何も知っちゃおりません、ただ……その……。

目明し ただその？ その「ただその」を聞かして貰おうじゃねえか。

留吉 なんなんでございます。この絵は源の頼光^{みねもと ちかひさ}てえ、強いおさむらいでございます。

目明し そんなことは判ってる。

留吉 おや、さようで。その頼光さまに四天王って四人のお家来衆がいらっしやいまして

な。

目明し そんなこと聞いてるんじゃねえ。この絵が何でああも、あいづらを騒がせるのか、

そのわけが聞きてえんだ。これには何か魂胆があるにちげえねえ。

留吉 ま、その……そういうことをいう者も、いるようでございますが……。私には頼光

さまのお館に土蜘蛛のやつが現れたところに見えますんでございませうがね。旦那には何か別のものに見えますか？（大きな絵を指し）ありやあ、頼光さまがお悩みのところ、紫の鉢巻をしめていらっしやるなんざあ、助六もどきですが、やっぱりこう、はすに結んでびいんとはね上げないと、野暮に見えますですね。へい。

目明し お前ごまかす気だな？

留吉 そ、そんな、一体、旦那は、この絵のどこが、おかしいとおっしゃるんでございま

す、え？

目明し そうさな。うーん。（と唸っている）やっぱりあのあたりだな。（と化物群を指す）

留吉 （ごまかして）ははあ、坂田の金時。この人は若い時が御存知の金太郎。足柄山で熊

さんと相撲をとりましてね。えいやっと……。 （と身振り）

目明し ちがうちがう。金時の上の化物だ。

留吉 化物ね？ 化物がどうか致しましたか？

目明し こいつが怪しい。

留吉 そりゃ旦那、化物ですもの。化物が怪しくなかった日にゃ商売上ったりでござん
しょ。

目明し この化物に魂胆があるにちげえねえ。

留吉 さよですかね、魂ばくこの世にとどまりてえ、なんてこと申しますからね。

目明し まぜつかえすんじゃねえ。おいどうしてあのダルマにはミミズクがくつついてるん
だ？

留吉 え？ ダルマ……ダルマなんて居りましたっけかねえ？ 何しろこの化物の勢揃い
ときちゃ……。ああいました、いました。隅っこの方に、あれですな？

目明し ミミズクが額のところについてるじゃねえか。

留吉 ほんと、ついてますね。

目明し こりやどういうわけだ？ どうしてミミズクをつけたんだ？

留吉 そ、そんなむりいっちゃいけません。何かきつとお考えがあるんでしょうがねえ。

目明し うーむ。ここいらに魂胆があるにちがいねえ。

留吉 そうでしょうね。ただダルマさん描いたんじゃ化物になりませんものね。ここへミ

ミズクを描いたんで、はじめて化物になるってわけだ。ねえ旦那、そういうわけでしょう？

目明し　こいつ！　さっき手前は、これを描いた国芳とは親戚同様とか何とかいつてたな？

いとこ同志か、それとも伯父、甥の間柄か？

留吉　いいえ。この国芳て人とは何の血筋も引いちゃおりません。

目明し　じゃ親戚じゃねえじゃねえか？

留吉　ですから同様といいましたわけで……。実は主人筋に当る人でございまして。

目明し　主人筋？　そんな恩のある人を親戚同様とは太えことをいうやつだ。

留吉　しかし、話を聞いて下されば、強^{あなが}ちそういったからって、私が恩知らずというわけでもないことがお判りでございましょう。はい、じゃお話し致しましょう。時代がずつ

と後戻り致しまして、今から二十年前、国芳師匠が日本橋本銀町の大きな染物屋、柳屋から勘当になりまして、深川のなめくじ長屋でくすぶっていたころのこととでございます。

錦絵のドロップ揚げり、なめくじ長屋の国芳の住居。腐れかかったような長屋で、下手の一間で胡瓜^{きゅうり}先生こと橋川又右衛門が、オランダ語の勉強に励んでいる。至って朴念仁で真面目だが、余り明敏な方ではないらしい。

目明し あれが国芳か。

留吉 (みて) え? ちがいますちがいます。見かけないお仁ひとですがおさむらいのようでご

ざんすね? 声をかけてみましょう。(行きかける、が思い直して戻って来る) 旦那、すみません、二十年前って申しますと、私の頭だってもう少し黒かったんで。(と鬘をとりかえる) はい、これでよしと。では行つて参ります。旦那、この話は十分長くなりますから、奥でゆっくりなさって下さいませ。

目明し そうか?

留吉 旦那の出番になりましたら、私大きな声でお呼びしますから。

目明し そうか。(入る)

留吉 さてと、腰もぴんとさせてね。何しろ二十年前だから。(行く)

胡瓜 (オランダ語を朗唱する) ヘット・キント・シュタルト・ナール・ヘット・ブランケ・

ダック・デ・ティンテレンデ・ステルレンヘーメル……。

留吉 もしもし今日は。

胡瓜 ヴァット・ヴェンスト・イウ?

留吉 (あっけにとられ、もじもじして) あのこちらは芳三郎さんのおうちで……。

胡瓜 (うなずいて) ヤア・ヤア・コーム・ヒーア!

留吉 (独り言) 一体こりゃなんだ？

胡瓜 ははは、驚くことはない。今のは蘭語だ。蘭語を口にしたのだ。

留吉 へえ団子を召上ったんで？ (キヨロキヨロみる)

胡瓜 ちがうちがう。蘭語とは即ち、オランダの言語だな。判らんか長崎の出島で通詞のしゃべる言葉だ。

留吉 へえ、へえ。唐天竺^{からてんじく}の異人のしゃべる……。

胡瓜 オランダは唐天竺ではないが、まあいいだろう。ま、お入り。芳さんも、おっつけ帰って来るだろう。

留吉 さようでございますか？ 手前は芳三郎さまの実家の柳屋の手代、留吉と申します。

胡瓜 そうか、拙者^{せつしや}は、ついふた月ばかり前からこの一間を借りている橋川又右衛門という浪人だ。

留吉 じゃ胡瓜先生てのは、あなた様のことで？

胡瓜 そうだ。

留吉 あ、さようでございますか。(顔をみて首をかしげている) へえ。

胡瓜 南瓜^{かぼちゃ}なら判るが、といったそうだな？

留吉 いえいえとんでもない、南瓜だなんて。

胡瓜　じゃ胡瓜に見えるというのか？

留吉　さよう、（見る）そういえば……。どっちかというと……。

胡瓜　本当をいうと胡瓜ちがいなのだ。拙者が何かというときと窮理、窮理というもので、それで芳さんが窮理先生と緯名あだなをつけたのだが、今じゃ長屋中、みんな胡瓜で通している。窮理とは即ち理を窮きまむるの意にして森羅万象の運行によつて来る所以ゆゑんの物を、究極まで問い正すことをいうのだな。判るだろう？

留吉　どうも私は学問がございませんで、もう「即ち」ときくと途端に耳がガンと致しましてあとは全く聞えなくなりますもので。へい、どうも申しわけございません。

胡瓜　うむ、そうか。即ちは、いかな。せいぜい噛みくだいて俗耳にも入り易いように申しているのだが。いや芳さんにしてもそうだ。なかなか判ってはいくれない。しかし、ふた月も一緒だと、少しは判りかけてきたようだ。何とかして物にしたいと考えている。さようでございませうか。あの若旦那は人一倍きかぬ氣のお仁ひとでございませうから、先生が御仕込み下さればきっと、学問の方も身につくこととございませうよ。

胡瓜　しかし絵は、こう申しては何んだが下手くそだな。

留吉　（反対して）さようでございませうか？　先生は絵の方もお判りで？

胡瓜　いや全くの素人だが、しかし、芳さんの絵が今のままじゃ物にならんことはよく判る。